

モントリオールから FUKUSHIMA と その先にできることは何か？

志村純子

11月1日の金曜日にモントリオールでちいさな映画上映会を行いました。“Beyond the Waves”という映画で、ベルギーの映像会社により制作されました。かつては俳優として、やがて2013年に東京選挙区から参議院議員に当選し、国会で反原発、反 TPP を訴え、大企業や保守派の既得権益によって痛めつけられた人々のために、声をあげた山本太郎氏を追ったドキュメンタリーです。

ご存知のように、この夏の第25回参議院選挙で、山本太郎氏は個人の得票数としては最高票数を得ました。比例代表制の特別枠に推薦したお二人の重度身体障がい者の当選を果たし、れいわ新選組を正式な政党として押し上げたものの、代表順位の第3位であることから、ご自身の参議院議員当選には至りませんでした。現在は、れいわ新選組代表として活動をされています。

この映画は、その選挙をさかのぼること1年前の2018年の作品です。山本太郎氏だけでなく、草の根的な支援者や、福島とその先にある多くの困窮している日本人の社会を描いています。たとえば、沖縄に集約された米軍基地の問題、大都会に横たわるホームレスの人々、勤労者に拮据する政治的無関心、若者、女性、子供、そして老人の暮らし、などです。どれも日本の真の姿ですし、そういった人々の声は、国の中央政府からは、ほとんど無視をされているのが現実です、というメッセージのこめられた映画です。



そんな中で、この映画を観た時に、わたしは、ふと、あるYouTubeのビデオを思い出しました。夏の選挙戦のころだったと思います。東京のどこかの街頭演説で、山本太郎氏が大声で叫んだシーンがありました。「人間を生産性だけで評価してはいけない。みんなが幸せに生きて当たり前。生きてくれよー！」というような言葉だったと記憶しています。これが、とても強く印象に残っています。少しだけわたしの見解を言わせていただくなら、健康で文化的に生きてゆくのは、日本国憲法で保障された基本的な権利のはずなのに、近年、わたしが日本に帰るたびに目にするのは、多くの日本人がそれを忘れたかのような光景が多くなったことです。それほど嬉しそうにも、楽しそうにも見えないし、悪態をつくか、その元気さえない方が電車で居眠りをしていたり…。効率よく、低コストで高い成果をあげなくてはならないと、圧力をかけられて、まるでペチャンコにされる閉塞環境に陥ったかのようです。ですから、「生きてくれよー！」という掛け声に共感し、希望の光を見出したのかもしれませんが。

上映後、先入観や日本における政治的な意見の違いは横に置いて、山本太郎氏からモントリオール自主上映会に向けられたビデオメッセージ (https://youtu.be/TA0ye6_cN5M 英語字幕は後日挿入) を流しました。この時、ただの一人も席を立って帰りを急ぐ方はおらず、全員が、画面にきぎ付けになったようでした。なぜでしょう？

映画を見終わって、モントリオールで福島原発の影響から避難を余儀なくされている人々を支援する会、モントリオール KIZUNA のみなさまから、この映画には福島在住の、モントリオール

KIZUNA と交流のある人々も写っているのです、と、知らされました。鑑賞された日本人の方々は、例外なく、もやっと、やり切れない感傷を持ちつつ、自分自身の、すぐそばの出来事として、映画を見たそうです。現在の日本の政策が、ごく普通の市民の暮らしに、著しい負担と打撃を与えてしまっていることに、心が痛んだそうです。

わたしも、物理的には、日本から遠くはなれた所にいますが、避難せざるを得なかった人々の、最近では公的支援なども打ち切りとなって、ますます悪くなっている暮らしなどを、モントリオール KIZUNA から聞き及んでいます。また、いわゆる風評被害をコントロールするために政府が行ってきた、数々の、安全を謳い続けるような介入は、現政権と行政には好都合であっても、汚染の影響を真正面で被っている人々にはそうではありません。

放射能汚染の健康へのリスクを説いている科学者の意見はもとより、毎日の生活の中で今も苦しんでいる被災者と、何よりも、放射線感受性の高い子供たちの安全と満足のいく生活が、最優先されてしかるべきだと思います。でも、実際にはそうっておらず、この長い8年間の事故後の期間に、福島の問題は風化しつつあります。放射性元素は、まだ崩壊していないのに、これでは人間社会の方が崩壊です。なんとかして、できることはないか、そういう思いをもっている方は多いと思います。

山本太郎氏はモントリオールのわたしたちに、こう呼びかけたのです。「今の日本ではいろいろなものが壊れてきている。この地獄のような状況をなんとか変えていかなくてはならない。変えていけるのは、わたしたち日本人です。そして海外に出て日本のことを思ってくださいているみなさんです。絶望はしていません、変えられます。どうぞ、一緒に変えていきましょう」海を隔てて、離れてはいても、これは、たまらない気持ちになりますよね。

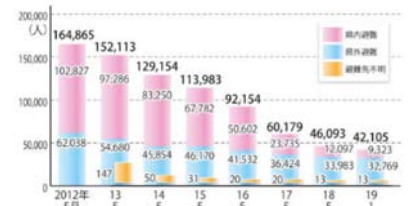
映画を見終わって、家に戻って、日本のために、あるいはご自身とご家族のために、何かできるかしら、と考えるのは、人それぞれでよいと思います。ただ、ご参考のために、参加された方から寄せられた意見をお知らせしますと、次のとおりでした。

カナダ人で、すこぶる日本語に堪能な大学教授は、自身の勤務する大学で2020年にこの映画を再上映するそうです。また、他の方は、福島と日本の情報交換をこれからも続けてほしいし、こういう会を自分でもやってみたい、とのこと。さらに、日本のシステム全体の仕組みや、社会的弱者に対する社会のセーフティネットについても、もっと詳しく説明を聞いた上で、もう一度映画を観たい、という方もいました。

モントリオールで、福島のその後や、日本の政策に関心をもっている方は、決して日本の出来事を、分断された場所から赤の他人を見るように眺めているわけではないのだと思います。あの晩の映画で、多くの方々が在外有権者として投票に行く、それ以外



にも草の根的に日本をなんとかして変えようと、日本のあちらこちらで拡散しつつある活動を応援したい。そんな、思いをもちながら、帰宅の途につかれたように見受けられました。わたしの中では、優しい日本人の方々と、カナダ人でありながら見に来てくださった熱心な方と出会えて、とても意味のあるたいせつな時間になったと思います。



最後に、上映日が記録的な強風の悪天候で、モントリオール市のあちこちで停電という事態にも関わらず、会場に足をはこんでくださり、日本への温かい応援を述べてくださったみなさまに、心から感謝を申し上げます。モントリオール自主上映委員会を立ち上げて運営も助けてくださった、橋爪亮子、サベール美幸、James Savelle、上坂美和子、池田朋子、モントリオール Kizuna の皆様、それにニューヨークから、ベルギーの配給元と連絡をしてくださったビヨンド・ザ・ウェイブズ自主上映連絡会の子田、荒瀬、ビデオメッセージをお送りくださったれいわ新撰組の山本太郎代表と担当者に、厚く御礼を申し上げます。

図の説明

- 1.モントリオール自主上映委員会で作成し、配布したチラシ。写真提供:ベルギーSophimage 社、デザイン:志村純子
- 2.避難者の推移,2019 3月現在、福島県から避難した者16万人のうち、42105人がいまだに帰宅していない。河北新報 Web News から転載。 www.kahoku.co.jp/tohokunews/201903/20190326_63043.html
- 3.11月1日山本太郎氏から届いたビデオメッセージのスクリーンショット、提供:れいわ新撰組、字幕制作:志村純子

筆者のプロフィール:志村純子、生物学者、国際公務員としてモントリオールに勤務。個人的にモントリオール KIZUNA に協力し、休日にはイル・デ・スールの侵略的外来生物駆除のボランティア活動中。趣味はハイキングとカナダの自然探索。

日系文化会館のアルバム



写真:左上 ドロップインでの絵葉書作り、左下および右上、着物バザー(以上、JCCM 提供)、右 2 段目から「餅つき」、餅を搗いている写真(Jennifer Sakai)、その他 y.s.